

コレ一 随筆



我が家のおばあちゃん犬

海邦病院 整形外科
工藤 啓久

我が家は17歳になる犬を飼っています。人では後期高齢者に充分入っている年齢のようです。シーズーという小型犬のメスで、名前はあすか、私がポリクリをまわっているときに18万円で我が家にやってきました。今はわかりませんが、当時はペットショップで人気の犬種だったようです。シーズーの起源は17世紀初めのチベットで当時この犬種は、神聖な犬として高い地位を得ていて、中国で獅子狗（シーズークゥ）と呼ばれていたことからその名がついたそうです。とくに清の西太后が溺愛していたことは有名で、当時宮廷では1,000～4,000頭ものシーズーたちが飼育されていたといわれています。

純系の犬種には、その犬種によってかかりやすい病気があり、シーズーは鼻腔狭窄、眼瞼内反症、白内障、進行性網膜萎縮症、乾性角結膜炎、股関節形成不全、外耳炎、呼吸器疾患、アレルギー性皮膚疾患があげられています。独特の目の大きな犬のため、目の病気が多いようです。今はかえって純系の犬より病気になりやすい点からmix（雑種？）の犬の方が人気があるようです。

我が家のおばあちゃん、あすかも白内障、緑内障、アレルギー性皮膚炎、皮脂をわずらっています。おそらく胆嚢炎もあります。視力はほとんど無く、耳もほとんど聞こえていません。歩行はぎこちなく、ふらふらと壁伝いに歩きます。眼の色が緑に見え、眼球がすこし飛び出したような状態になっているため、毎日点眼をしています。医療費は我が家でダントツで高く、月に1～3万かかっています。ちなみに最近高血圧症の診断で内科に行きはじめて終戦直後に生

まれた年代の母親（もうひとりのおばあちゃん？）も「わたしもこんな風になるのかね？医療費で老後のお金がなくなる」と不安がっています。週に3～4回プールかジムに行き、肥満もなく、血圧も高いといっても境界域で、最近運動不足の私よりあきらかに健康的と思われる人でも病名がつくと明日は我が身と思うようです。

こんなうちのおあばちゃん犬ですが、所謂“ぼけた”と思わせる症状を示したのは3年前アパートを引っ越した後のことでした。トイレの失敗が多くなり、無駄ぼえをし、夜中おろおろ徘徊し、狭いところへ入り動けなくなって鳴きつづけることがしばしばありました。毎日20分ぐらいしていた散歩も、家を出てすぐに抱いてくれといわんばかりに靴にのっかって動こうとしなくなりました。今から考えると、そのときからあまり眼は見えていないながらもなんとか感覚で生活していたのに、環境が変わったため、いろいろなことに対応できなくなったと思われる。インターネットで調べると、・食欲/下痢・生活リズム・歩行状態など10項目からなる“イヌの痴呆の診断基準”なるものがあることを初めて知りました。その時のうちの犬にあてはめるとかなりの高得点でした。

次第に体調もだんだんわるくなり、引っ越しをして3ヶ月後の冬には食事のままならないようになりました。数十秒の痙攣があったりして“もうだめかなー？苦しむことがあるなら安楽死も考えないといけなのか”と思うこともしばしば。いまさら引っ越ししたことを後悔しました。整形外科医である私は、大腿骨転子部骨折や、胸腰椎の圧迫骨折で入院してくる患者さんを診てきており、元気と言われている高齢者ほど環境の変化に弱く、入院2～3日で一気に認知症が進んでいくことをよく知っているのに…。と思いました。幸いなことに、母の介護の甲斐があつてか、冬を乗り切り、すこしずつ衰えながらも認知症の症状と思われる問題行動も少なくなり、食事も可能で、今も一緒に生活しています。トイレも誘導をすれば（時々抱えてトイレに）何とか可能でおむつも今は必要あ

りません。ほとんど寝ていて、かつてのアニマルコンパニオンのお仕事はほとんどできなくなりました。ただ一つ、私が帰宅すると、数十秒たったのち、“え、帰っての”という感じで起き上がり（足の振動？におい？何で感じているかは不明）、あたりをぐるぐるまわり、私が触れると甘える仕草を1分ぐらいとる習慣のみ、かろうじて残っています。毎日その行為があるだけで、なんとなく愛おしく感じながら、一番身近にある老いを痛感しています。

このように「老い」は、小さい我が家庭だけでなく、社会問題として我々の眼前にはっきりと存在しています。「ある年齢集団に対する、否定的ないし、肯定的偏見もしくは差別」は明らかに精神的、制度的に存在すると思われまます。ある作家が“「老い」を考えることは、「生きる

かたち」を考えることではないだろうか”と述べていました。わたしは生きるかたちを考えながら老いに接していけるのか？これに対して何ができるのだろうかと思う今日この頃です。

★リレー状況

—平成17年以前掲載省略—

- 50. 樋口大介先生（独立行政法人 国立病院機構
沖繩病院） Vol. 42 No.3
- 51. 古謝淳先生（南山病院） Vol. 42 No.5
- 52. 城間清剛先生（城間クリニック） Vol. 42 No.7
- 53. 野原正史先生（のはら元氣クリニック）
Vol. 42 No.10
- 54. 久貝忠男先生（沖繩県立南部医療センター・
こども医療センター） Vol. 42 No.12
- 55. 米田恵寿先生（沖繩県立宮古病院）
Vol. 43 No.3
- 56. 仲地広美智先生（宜野湾記念病院）
Vol. 43 No.6
- 57. 与座一先生（ハートライフ病院） Vol. 43 No.9
- 58. 勝連英雄先生（かつれん内科クリニック）
Vol. 43 No.12
- 59. 真栄田宗慶先生（アメカル耳鼻科クリニック）
Vol. 44 No.3
- 60. 池原康一先生（中部徳洲会病院） Vol. 44 No.5



原稿募集！

プライマリ・ケアコーナー(2,500字程度)

当コーナーでは病診連携、診診連携等に資するため、発熱、下痢、嘔吐の症状等、ミニレクチャー的な内容で他科の先生方にも分かり易い原稿をご執筆いただいております。
奮ってご投稿下さい。